日本語研修コース修了生の実態調査

留学生センター　祐宗　省三
留学生センター　多和田眞一郎
留学生センター　田畑　佳則
留学生センター　中川　正弘
留学生センター　深見　兼孝
留学生センター　田村　泰男
留学生センター　峯　正志
留学生センター　田中　共子

はじめに

広島大学留学生センター日本語研修コースは、中国・四国地区の国立大学（大学院）で専門教育を受けたり、研究に従事したりすることになっている国費の外国人留学生で、日本語力が十分でない者に対して予備教育として六ヵ月間集中的に日本語教育を行うプログラムとして一九八五年一〇月に広島大学に設けられた。以来六年（一二期）を経過し、これまでに二一〇余名の修了生を送り出してきている。しかし、修了生達が各大学（専門教育）へ進学してからの実態については、これまでのところ全体的な把握はなされていない。

本コースの役割と意義を再認識し、カリキュラムの改善を図りながらプログラムを一層充実させていくためには、修了生の専門教育進学後の実態（日本語の使用状況・必要性・学習、適応状況など）について把握することが必要であることから、本コースの修了生達に対して調査を行った。

調査及び調査結果の概要

調査は一九九二年二月から三月にかけて行われた。第一期から第一二期までの修了生二一三名全員に日本語および英語版の質問紙を郵送し、八八名から回答を得た（回収率四一・三%）。専門教育進学後のみならず、来日前および日本語研修コース在籍中の様子に関する具体的かつ詳細な資料も得られた。

回答者の内訳は、男性六〇名（六八・二%）、女性二八名（三一・八%）で、学生（五七%）、大学教員（九%）、その他（三四%）であった。来日時の年齢は二〇～三六歳（平均二九・二歳）、来日前の職業は大学教員（四七%）、学生（一二%）、その他（四一%）で、八%は博士、四四%は修士の学位を有していた。また、日本語のバックグラウンドが全くない者は五八%であった。

日本語研修期間中かなりの者が日本語力の向上、大学院入試、指導教官との関係などに対して不安を抱いていたことがわかったが、コース修了後の進路に関しては、六八%が大学院を受験しており、そのほとんどが合格していることが明らかになった。

進学した大学については、一四%の者は期待以上、六〇%は期待通り、二六%は期待以下であったと答えている。期待以上であった理由としては、主として指導教官や同僚との人間関係が良かった点が、また、期待以下の理由としては、施設・設備の不備、指導体制、専門分野・領域の違いなどがあげられている。しかし、留学目的の達成度については、専門研究においてかなり高く、留学生活全般に対する満足度もかなり高くなっている。

日本語に関しては、五八%の者は来日前に日本語のバックグラウンドが全くなく、残りの四二%の者はあったと答えているが、あったと答えた者も学習期間は短く、平均は二・四ヵ月にすぎない。六ヵ月の日本語研修において、四〇～五〇%の者は日常生活に必要な会話や、研究についての話などがかなりできるようになると期待し、三〇～四〇%の者は新聞や本や論文を読んだりレポートを書くといったこともある程度できるようになると期待していたと答えている。しかし、コース修了後の自己評価では、それらは思ったほど向上しておらず、期待との間にかなりのギャップがみられる。六ヵ月の期間からすれば当然すぎる結果ではある。

専門教育へ進んでからの日本語の必要性は、論文やレポートを書く上でよりも、授業を受けたり、本や論文を読んだり、研究について話し合ったりする上で強く感じられている。会話能力は一年以内でかなり向上しているようであるが、読み書きの能力は五〇～八〇%の者がまだ十分ではないと答えている。しかし、進学先の大学で日本語の授業を受けた者の割合は四三%にすぎない。

六ヵ月という日本語研修コースの期間については、半数が適当、四三%の者は短すぎると答えている。また、その間に各学部の協力を得て行っている専門用語解説については六〇%の者が時間数が少なすぎると答えているが、五七%の者は自分の専門とうまく合っていなかったと答えており、多岐にわ